

中島華鳳の写生帳にみる愛媛の風景

甲斐 未希子※

はじめに

愛媛県歴史文化博物館（以下、当館）は、大正初期に瀬戸内海を旅した画家・中島華鳳の写生帳を八冊所蔵し、当館の資料目録第一七集^①において紹介している。また、令和六年（二〇二四）二月には、瀬戸内海国立公園指定九〇周年を記念して開催した特別展「瀬戸内海ツーリズム」においても、近代の旅行記録として描かれた瀬戸内海の姿を紹介した^②。

今回、改めてこれらの写生帳を取り上げるのは、中島華鳳という人物について、不明な点が多いと感じたためである。本論では、近代に開催された展覧会の出品目録や美術系の雑誌等から、中島華鳳の活動や作品についてその一端を明らかにすることを試みる。また、当館が所蔵する写生帳八冊を基に、華鳳の旅の内容を整理し、華鳳が目にした愛媛の風景を紹介したい。

第1章 画家・中島華鳳

1 中島華鳳とは

まず、画家・中島華鳳について整理する。大正元年（一九一二）に発行された雑誌『美乃世界（六一）』^③には、「中島華鳳氏 初め画を鉄斎翁に学ぶ性洒脱にして俳画を能くせり、風流寡黙画も亦其人と似たり面白き作家なり。」と紹介されている。次に、大正二年（一九一三）の『明治画史大正画家列伝』^④には「中島華鳳 住所京都富山小路大炊町 慶応二年京都に生る、円山派」とあり、大正七年（一九一八）の『日本美術画家詳伝 続』^⑤には、「名ハ憲章、華鳳ハ其號、京都ノ人、慶応二年生ル。圓山派ノ画家ナリ。」と記載される。

これらの情報をまとめると、中島華鳳は、慶応二年（一八六六）に京都に生まれ、名は憲章、號が華鳳である。その性格は洒脱、つまりさっぱりしていて、

嫌みながない人であったという。そして、画は初め富岡鉄斎に学び、円山派の画家として活動していた。

円山派とは、江戸時代に活躍した京都の円山応挙（一七三三―一七九五）を祖とする絵画の一派で、写实的様式が特徴とされている。応挙は様々な流派の絵を学び、幅広い画風を獲得したこともあり、弟子たちも応挙の画風を自分なりに変化させていった。そうして、森狙仙（一七四七―一八二一）^⑥、森徹山（一七七五―一八四一）の流れから森派、岸駒（一七五六―一八三八）^⑦からは岸派、原在中（一七五〇―一八三七）からは原派と、円山派の亜流派とも言うべき流派が次々と生まれる^⑧。

先に紹介した『美乃世界（六一）』では、華鳳は初め富岡鉄斎に画を学んだとあり、円山派の画家に師事したのは後のことのように思われる。そこで、まずは中島華鳳と富岡鉄斎の関係について整理する。

2 中島華鳳と富岡鉄斎

「最後の文人画家」と称えられる富岡鉄斎（一八三六―一九二四）は、京都の商家出身で、名は猷輔、のち百鍊。儒学、国学、仏教等を学びながら、南宋画等も独学し、様々な作品を残している。また、京都美術協会や日本南画会、新古美術品展覧会等の美術団体や展覧会等に、役員や審査員として迎えられ、ことも多く、京都市美術学校では嘱託教授として修身の授業を担当した^⑨。

鉄斎と愛媛の関係については、その妻が愛媛県出身であることや、愛媛出身の友人との交流等が知られている。鉄斎の初婚は慶応三年（一八六七）で、画家である中島華陽の娘・達と結婚し、翌年には長女の秋が生まれた。しかし、明治二年（一八六九）に達が二十一歳で亡くなり、秋は鉄斎の義兄に引き取り

れ、鉄斎の母によって育てられることとなる。再婚したのは明治五年（一八七二）のことで、その相手が愛媛県出身の春子であった。^⑩春子と結婚した翌年に、鉄斎は愛媛を訪れている。鉄斎が愛媛滞在時に三津浜の石崎家や近藤文太郎と交流していたことは有名であるが、その交流については中島華鳳も知っていたように、写生帳にそのことを記してある。華鳳の写生帳の記載については、後の章で詳細に紹介したい。

中島華鳳と富岡鉄斎の関係をうかがう上で、最も有名な作品は京都国立博物館に所蔵される「富岡鉄斎像」^⑪だろう。この作品は、明治期に作成され、華鳳が鉄斎の姿を描いた絹本墨画淡彩の一幅である。富岡鉄斎は、賛に次のように記す。^⑫

「魁星図」（肖形印）

喫飯穿衣七十春

硯田耕稼是安身

受天清福能知楽

我亦熙朝寿老人

古稀老人鉄斎百鍊

題 明治四十一年一月一日再観

點晴時年七十三

「富岡百鍊」（白文方印） 「無量寿佛堂」（朱文六角印）

「點晴時年七十三」とあることから、鉄斎が七十三歳の明治四十一年（一九〇八）に、この肖像画の仕上げとして筆を振るったことがわかる。また、鉄斎の肖形印「魁星図」と白文方印「富岡百鍊」、朱文六角印「無量寿佛堂」が押されている。この時、中島華鳳は四十一歳であり、長年に渡り鉄斎と交流があったことがうかがわれる。

また、鉄斎作品を多く所蔵する辰馬考古資料館『富岡鉄斎・辰馬考古資料館新収辰馬悦蔵翁旧蔵』^⑭には、「中島華鳳に贈った皴法の手本。原作は蕪村。」と説明された「石譜」が掲載されている。さらに、『文人書譜』十二には、「落款手本帖」が掲載されており、鉄斎が華鳳の為に書いたものと説明されている。^⑮

このように、数点ではあるが華鳳と鉄斎の交流についてうかがい知ることができる。

3 中島華鳳と今尾景年

次に、中島華鳳と関係ある人物として取り上げたいのが、今尾景年である。富岡鉄斎は今尾景年の画技を高く評価しており、景年へ新居祝いの書を贈るなど親交があった。^⑯

今尾景年（一八四五～一九二四）は、京都友禅の染屋の家に生まれ、名は永歎、字は子裕、號は養素斎、聊自樂。浮世絵を梅川東居に学び、明治六年（一八七三）に鈴木百年^⑰に入門する。また、三国幽眠に漢学や皇学も学ぶ。後には家塾を開き指導にもあたった。^⑱明治二十八年（一八九五）京都後素協会設立で委員長を務め、明治三十三年（一九〇〇）パリ万博で「春山花鳥図」^⑲で銀牌を受賞する。花鳥画の名手として知られる景年は、『景年花鳥画譜』^⑳などを著しており、精密な写生技術を見ることができるといえる。

『京都に於ける日本画史』^㉑では、今尾景年の家塾に学ぶ人物について次のように記している。

今尾景年——木島櫻谷、伊藤素軒、今尾雪嶺、岡島海雲、吉田松村、小栗翠香女、梅村景山、坂口呉年、乾梅亭、石井素堂（初め狩野洞伯門柳本洞素、後ち川端玉章）、上田萬秋、中島華鳳、野澤如洋（初め南溟南湖の南北混合派）
ここから、中島華鳳が今尾景年に師事していたことがうかがえる。さらに、中島華鳳と今尾景年の繋がりを見ることができるのは、祇園祭の山鉦の一つ、岩戸山である。京都画壇の画家たちは、祇園祭の山鉦の装飾も手掛けており、円山派や四条派の画家が多く、他に狩野派や土佐派、岸派、南画系の画家も散見される。^㉒

岩戸山は「天の岩戸」と「国生み」、二つの神話を主題にした意匠を有している。現在は、御神体として天照大神と手力男命の人形が搭載され、大屋根の上には伊弉諾尊の御神体人形が居る。岩戸山の創建は不明であるが、八坂神社の「祇園社記」第十五に応仁の乱に至る約三十年間に巡行した山鉦として記されてい

ることから、嘉吉元年（一四四一）の祇園会再興の際に建立されたものと推測されている。応仁の乱後の「祇園社記」では岩戸山ではなく「あまのさかほ山」となっており、この時に伊弉諾尊が加えられたようである。

現存する岩戸山の図として最古のものは、国宝「紙本金地着色洛中洛外図 狩野永徳筆 六曲屏風」（米沢市上杉博物館蔵）とされるが、その姿は伊弉諾尊だけが飾られており、岩戸山であった名残は鳥居の鶏の姿に見ることができよう²³。岩戸山を初め、祇園祭の山鉾は火災等の被害を受けるも、その姿を変化させながら貴重な品々を伝えている。

岩戸山の大屋根の軒裏に描かれる「金地四季草花図」は、今尾景年が最晩年に手掛けた作品で、大正七年（一九一八）に描かれ、重要有形民俗文化財に指定されている。景年は切妻屋根の裏板も手掛ける予定であったが、大正十三年（一九二四）に逝去する。ここで、景年の仕事を引き継いだのが、弟子とされる中島華鳳であった。絵筆を振ることとなった華鳳は、昭和六年（一九三一）に三羽の鶴鴒が踊るように飛ぶ姿を描いた「板地金泥着彩 鶴鴒図」を完成させる。鶴鴒はイザナギ・イザナミがこの鳥の動作を見て男女交合を知ったとされており、岩戸山に伊弉諾尊が飾られていることから、華鳳は鶴鴒を描いたのだろう。

4 中島華鳳の活動

富岡鉄斎や今尾景年に師事していた中島華鳳であるが、どのような展覧会に出品していたのだろうか。まずは、近代における国家的事業であった内国勧業博覧会について確認する。

内国勧業博覧会は、明治政府が殖産興業政策の一環として開催した国内生産物の博覧会である。明治一〇年（一八七七）、第一回内国勧業博覧会が東京上野公園で開催され、同三十六年（一九〇三）に大阪で開催された第五回で終了する。第一回から第五回までの開催時期と会場は次のとおりである。

第一回 明治十年（一八七七）八月二十一日～十一月三十日

会場…東京・上野公園

第二回 同十四年（一八八一）三月一日～六月三十日

会場…東京・上野公園

第三回 同二十三年（一八九〇）四月一日～七月三十一日

会場…東京・上野公園

第四回 同二十八年（一八九五）四月一日～七月三十一日

会場…京都・岡崎公園

第五回 同三十六年（一九〇三）三月一日～七月三十一日

会場…大阪・天王寺今宮

中島華鳳が初めて出品したのは二十四歳の時、東京・上野公園で開催された第三回内国勧業博覧会からであった。第三回内国博は、国際性を意識した博覧会となっており、第二回に比べ出品点数が飛躍的に増加した。華鳳が出品した作品は「着色走獸懸幅」で、住所は「京都市下京区仏光寺通釘隠町」である²⁴。

第四回内国博は、平安遷都千百年記念祭の一環として京都で開催された。内国博の開催決定を受けて、京都では交通網の整備や衛生環境の改善、平安神宮の創建などを実施し、観光都市として近代化が薦められた。出品作品では、美術工芸が染織品を中心に多数出品される。第四回内国博より、それまで輸出口的の殖産興業中心から、都市への復興や観光化へと、そのあり方が変化した²⁵。華鳳（当時二十九歳）は、第四回内国博には「月下鴻雁之図」を出品している²⁶。住所は「同（下京区）高辻通高倉東入泉正寺町」となっており、第三回内国博の時とは異なっていた。また、出品者名が「中島豊次郎 號華鳳」と表記されている。明治二十三年の『絵画展覧会出品目録』²⁸においても、「中島豊次郎」で「猛虎図」を出品しており、正確な時期は不明であるが、豊次郎の名で出品することもあったようである。

第五回内国博は、第四回に引き続き関西圏の大阪で開催された。第五回はこれまでの内国博の規模を凌駕する博覧会となり、娯楽性の高い余興なども実施され、大阪らしいアイデアが盛り込まれたものであった。三十七歳となった華鳳が出品したのは「朧月猛虎」という作品であった。また、住所は「下京区新門前中之町」に移っている。

明治期には内国勸業博覧会の他に、シカゴ・コロンブス万国博覧会やパリ万国博覧会等の万国博覧会も開催されていたが、華鳳がこれらの万国博覧会に出品した記録は確認できなかった。では、華鳳はその他に、どのような活動をおこなっていたのだろうか。

明治四十一年（一九〇八）の『美乃世界（九）』⁽²⁹⁾に、この年に京都に移駐が完了した第十六師団の歓迎会に関する記事がある。第十六師団は、日露戦争末期の明治三十八年（一九〇五）四月に熊本で新設され満州方面に派遣され、戦後日本に帰還し、大阪府下に仮屯営。その後、京都へ移駐したが、その歓迎会が東福寺で行われる。記事には「本社寄贈の記念絵葉書、十二画伯の席上揮毫」とあり、「本社」とは『美乃世界』を刊行する美術新報社と考えられる。記念絵葉書揮毫席は東福寺方丈の大広間で行われ、鈴木松年・西村秀岳・永井香圃・小西福年・大江良起・梅村景山・宮城董村・田村宗立・国井應陽・森雄山・幸野西湖らとともに、中島華鳳も参加した。揮毫した画家たちがどのような作品を描いたのかは知ることができないが、「筆に随つて山となり或いは川、花鳥人物立ちに成り、墨痕淋漓、筆力また雄渾なるもの多く」と、画家たちが筆を振るうさまがうかがえる。

『美乃世界』では京都後素協会の活動に関する記事もあり、華鳳の姿を見ることが出来る。まず、京都後素協会とは、明治二十九年（一八九六）に発会した画家の団体である。その始まりは、慶応二年（一八六六）に設立した「新古書画展覧および動植物写生」の研究団体に遡り、明治元年（一八六八）に「如雲社」⁽³²⁾と命名される。その後如雲社は、明治二十八年（一八九五）に京都後素協会と改称し、定期的に絵画展覧会を実施、絵画に対する画家の研究を促すことを目指し活動した。⁽³³⁾

明治四十二年（一九〇九）の『美乃世界（二八）』⁽³⁴⁾に「後素協会の小品展覧会」という記事がある。小品展覧会は、同年七月四日・五日に京都倶楽部において開催され、出品数は一四〇〜五〇点にも及び、両日盛況であったようだ。出品者は後素協会の会員であり、今尾景年や竹内栖鳳等の作品が筆頭に挙げられている。その中に、中島華鳳の名前もあり、華鳳が後素協会の一員として活動し

ていたことがわかる。また、同年九月の『美乃世界（二〇）』⁽³⁵⁾には「後素如雲社月次会」に関する記事があり、中島華鳳は「雪景平等院」を出品する。

明治四十五年（一九一二）二月には『美乃世界（五二）』⁽³⁶⁾の臨時増刊が刊行され、嵐山倶楽部設立の展覧会について取り上げている。嵐山倶楽部は、明治四十四年に設立し、その趣書や規則は『美乃世界（四十二）』⁽³⁷⁾に掲載されている。嵐山倶楽部設立の展覧会には、多くの画家が出品しており、鈴木松年「梅林山水」、今尾景年「櫻花小禽」、竹内栖鳳「渡猿橋」、富岡鉄斎「青緑山水」等大作が並んだ。華鳳は、第二十七号として「水中の鷺鴨」（絹本着色、竪四尺五寸巾尺五）を出品しており、「雄雌の鷺鴨適意水中に遊泳せる図なり、着色極めて鎮静にして総体落付きのある図なり、水の波紋も亦可なり」と説明文が付けられている。⁽³⁸⁾

明治四十二年から十二支画会という会が、毎年干支を題材にした作品千幅を展示する展覧会を開催していた。『美乃世界（六一）』⁽³⁹⁾では、翌年の干支・丑に因み、牛の図千幅を会員に募集した記事が掲載されている。この年は第五回に当たるようで、「第五回十二支画会規程」では、絵画について「唐紙半切、白紙半切着色または水墨密画「牛」の図」とされ、表装は「榛原揉紙本表装一文字入にて黒塗軸付箱入りとす」と決められていた。また、絵画は「一千麻衣を以て一組とし筆者は左の三十五名に限る」とし、画家と枚数が列記された。この十二支画会には今尾景年や竹内栖鳳も参加しており、彼らには二枚以上の絵画が割り当てられていた。華鳳の名前も確認することができ、「数枚」の牛の図を割り当てられていたようであるが、実際にどのような作品を描いたのかは明らかではない。華鳳がこの十二支画会に参加したのは第五回の牛の図からで、第六回・虎の図の画家名簿にも名前を確認できる。⁽⁴⁰⁾

以上、中島華鳳の活動について、国立国会図書館のデジタルコレクションで公開されている資料を中心に調査し、その内容を【表一】にまとめた。現存する作品で所在が確かなものは、「富岡鉄斎像」と岩戸山の「鶴鶴図」であり、その他は未確認である。これらの作品の所在が明らかになることに、期待したい。

表 1

年代	年齢	内容	作品
慶応 2 (1866)		京都に生まれる	
明治 23 (1890)	24歳	第三回内国勸業博覧会 出品	着色走獸懸幅
28 (1895)	29歳	第四回内国勸業博覧会 出品	月下鴻雁之図
36 (1903)	37歳	第五回内国勸業博覧会 出品	朧月猛虎
40 (1907)	41歳	富岡鉄斎像を描く	富岡鉄斎像
42 (1909)	43歳	後素協会の小品展覧会 出品 後素如雲社月次会 出品	不明 雪景平等院
45 (1912)	46歳	嵐山倶楽部設立展覧会 出品	水中の鷺鴨
大正 1 (1912)	46歳	第五回十二支画会 出品	不明 (牛の図)
2 (1913)	47歳	第六回十二支画会 出品	不明 (虎の図)
昭和 6 (1931)	66歳	祇園祭若戸山 (妻屋根裏板)	板地金泥着彩 鶴鶴図

5 中島華鳳が描いた写生帳

ここまで、中島華鳳がどのような展覧会に出品していたのか、筆者が確認できる範囲ではあるが、列記してきた。ここだけ見ると、華鳳の出品数は多いとは言えず、現存する作品も多くないのかもしれない。だからと言って、あまり絵を描いていなかった、ということはないようだ。

昭和六十年（一九八五）十一月の『古典籍下見展観大入礼会目録』^④には、「中島華鳳写生帳」として一八〇冊が掲載されていた。説明文には「鉄斎門下唯一「富岡憲章蔵書」「粉本下絵」とある。ここで気になるのが、「富岡憲章」とい

う人物である。「憲章」といえば中島華鳳の名であるが、「富岡」という姓を名乗っていたのかは不明である。または、「富岡憲章」は中島華鳳とは別の人物であるか、中島華鳳を研究する上で注目すべき名になるかもしれない。

また昭和六十三年の同誌には「中島華鳳画稿」が出品されており、「写生帳三十冊・まくり・粉本他」と、多数の関連資料が売りに出されている。さらに、同年の『明治古典会七夕台入礼会目録』^⑤には、「中島華鳳下絵」と題し「大小粉本、綴本、箱入」が掲載される。これについては、数量が1箱となっており、点数を知ることにはできないが、画像には4点掲載されていることから4点以上の写生帳が現存していたと思われる。

入礼会で売りに出されていた華鳳の写生帳は、いずれもまとまったもので、華鳳が多くの写生帳を残していたことがうかがえる。当館が所蔵する華鳳の写生帳も、これの一部だった可能性も考えられる。これら大量の写生帳が、現在どのような状態になっているのか追うことはできないが、今後も華鳳の写生帳が発見される可能性はあるのではないだろうか。

第2章 華鳳が残した写生帳

1 八冊の写生帳

では、当館が所蔵する八冊の写生帳について見ていきたい。年代は、大正元年（一九一二）から大正四年（一九一五）で、縦帳や横帳に風景や人・動物などが描かれている。それぞれの写生帳について整理すると、次のとおりとなる。

① 「写生帳」（大正元年十一月三日）、縦帳

表紙には「中島華鳳蔵」の署名あり。前半には伊予国西條で目にした「漁舟干綱」の写生が多くある。他には、鯛や石鎚山、畑を耕す牛の姿、瓢箪等が描かれる。

② 「写生帳」（大正元年）、横帳

表紙には「華鳳蔵」の署名。伊予国西條において、共同鉾山での作業の様子や、米俵を作る様子等を写生する。

③ 「讃岐国名所日記」（大正二年三月十三日）、縦帳

伊予国今治から讃岐国までの道中写生日記。表紙には「憲章蔵」とあり。三月五日、今治での写生に始まり、讃岐国の象頭山、五剣山、志度寺を巡り、三月二日には屋島山からの眺望を描いている。

④ 「伊予国松山日記／厳島宝物日記／写生帳」（大正甲寅暮秋）、縦帳

厳島神社の宝物や景観のスケッチから始まり、伊予国松山へ向かう途中の風景等を描いた写生帳。大正三年十一月のもので、表紙には「平安憲章蔵」の署名と落款が押されている。

⑤ 「伊予松山旅行」（大正四年二月二五日）、横帳

大正三年十二月十八日に訪れた砥部のスケッチから始まり、旅程の内容が書き記されている。表紙に「華鳳蔵」の署名がある。

⑥ 「写生帳」、縦帳

他の写生帳とは異なり、表紙には標題も署名も無く、瓢紐の掛け方のスケッチがある。中には、梅の木や三津浜からの遠望等が描かれており、写生のメモ書きから大正三年一月から大正四年二月頃と思われる。

⑦ 「伊予国松山名所写生帳」、横帳

表紙には「平安華鳳蔵」、年代の記載はないが、内容から大正四年二月頃の写生帳であることがわかる。華鳳が見てまわった松山の名所が描かれる。

⑧ 「写生帳」（大正四年四月二二日）、縦帳

高浜の海岸や四十島、参拝した大三島神社の社殿、四国遍路の札所でもある太山寺やそこから観る風景を描く。表紙には、「平安華鳳蔵」とある。

八冊の写生帳を整理すると、華鳳が大正元年から四年にかけて、二度、愛媛を訪れていたことがわかる。一度目は大正元年から二年で、写生帳①～③が該当する。二度目は、大正三年から四年で、写生帳④～⑧がその記録である。そこで、各写生帳を基に、二度の愛媛旅行の様子について明らかにしていく。

2 大正元年～二年の旅

まず注目すべきは、③の「讃岐国名所日記」である。表紙には、次のように記されている。

大正元年秋十一月 憲章蔵

伊予国西條幸町住居ス、起六ヶ月

新居郡之内

大正貳年三月十三日出立、今治ニ出テツ、イテ

帰途讃岐国二渡る道中、写生日記

讃岐国名所日記

ここから、中島華鳳は大正元年の五月頃から、愛媛県西条市の幸町に滞在していたことがわかる。そして、翌年三月まで愛媛県に滞在し、京都へ帰る道中に香川県の風景を写生したものが③「讃岐国名所日記」である。つまり、大正元年～二年の旅というのは、愛媛を出発地とし、香川を経由し京都へ向かうものと考えられる。ただ、現存する資料からは、愛媛を出発し、香川の名所を巡る様子までしか知ることができず、香川から京都へ向かったのかは不明である。

では、大正元年・二年の旅で、華鳳はどこを訪れ、何を描いたのだろうか。六ヶ月ほど伊予国西條幸町に滞在した華鳳は、多くの漁船を描いている。写生

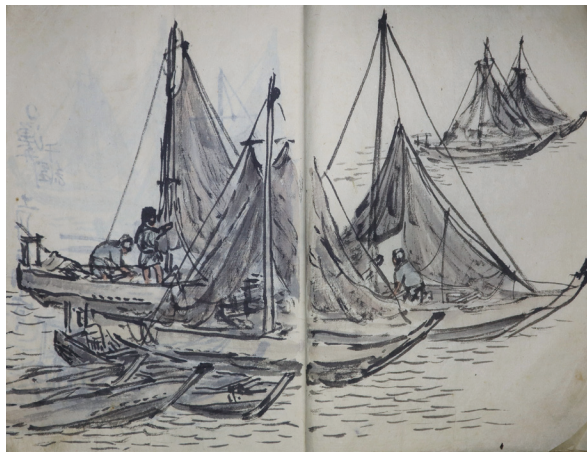


図1

帳のメモ書きで最も古い日付は大正元年十一月九日の朝写した「漁舟干網」である。「伊予国西條新浜舟附」とあり、数隻の漁船が並んでいる様子が描かれる(図1、第3章図9～10)。十一月中は漁船や漁の様子に興味があったようで、雨の日であっても、早朝に写生へ出かけていた。また、「西條中学校」(現愛媛県立西条高等学校)の周辺では、日露戦争の戦没者記念碑などを写生しており、これらの碑は現在も確認することができる。⁴⁾

十二月に入り、華鳳は漁船ではな

正確な日付は不明であるが、華鳳は岩佐運平のもとを訪れている。岩佐運平は明治四年（一八七二）に西条に生まれた歌人で、運平は号である⁴⁶。華鳳は運平宅へ遊行した際に、米俵を作る工程を見学し、その様子を描いている（図2）。翌年一月は氷見に行く車上から脱穀の様子をスケッチしたり、海岸で鳥の写生をしたりした記録があるが、2月の様子をうかがうことができる記録はなかった。そして、三月に西条から今治へ移動する。

大正二年三月十三日、午前八時、車で今治へ出る。今治では「吉忠旅館」に九日間滞在し、近隣の海辺や旅館にいたコウモリなどを観察、写生している。現存する写生帳には牛や鳥やコウモリ等、動物のスケッチも多くみることができる。

三月十九日、華鳳は「宇和島新汽船」にて今治を出港し、その日の暮に多度津へ到着する。宿は、江戸時代末期から営業している金毘羅社前の「虎屋旅館」であった。翌日は、金毘羅山の奥の院へ参拝、讃岐富士等の遠景を写生し、善通寺へ移動した。善通寺では弘法大師千百年祭の参拝として、「金式円」を奉



図2

く農耕の方へ興味を移したようだ。稲刈りの様子や、田畑を牛で耕す様子などを熱心に写生する。そして十二月二十五日には、「市之川共同鉦山巡視」と題し、石割所や、そこで作業する人々の様子を写している（第3章の図16、18）。市之川鉦山は、愛媛県西条市市之川（旧新居郡大生院村市之川）にあり、輝安鉦を産出した鉦山である。当時は、世界的にも有名な輝安鉦の産地であり、華鳳も興味深く見学していたようだ。



図3

納している。また、六萬寺にも参詣し、五剣山を望む風景を描いた（図3）。その後、高松まで出た華鳳は、「田中汽船問屋」に一泊し、翌日五剣山や壇ノ浦、志度寺等の巡遊を楽しんだ。また図3は、五剣山を望む風景を描いたものであるが、実はこの風景画は見開き二ページに渡り描かれている。写生帳の形態は縦帳や横帳であるが、華鳳は目に映る風景を何ページにも連続して描いており、華鳳の観察力や写生技術の高さを見ることができ⁴⁷る。こうしたパノラマ景のスケッチは、当館所蔵の華鳳写生帳の特徴ともいえる。

大正元年から二年にかけた旅の記録は、大正二年三月二十二日の屋島から望むスケッチが最後であった。華鳳の写生帳には、「京都富小路夷川上ル大炊町／在伊予国西條幸町住居」あることから、最終的には京都へ帰ったのではないかと考えられる。第1章で述べたように、華鳳は大正元年の丑年と大正二年の寅年に十二支画会に参加して

いる。十二支画会のための作品が、どのようなスケジュールで描かれ、出品されたのかは不明であるが、これらの作品は旅の合間に、京都の自宅で描かれたのではないだろうか。

【大正元年～二年の写生（一部抜粋）】

- 11・3 漁船干綱・伊予国西條新浜舟附
- 11・11 漁船綱干
- 綱干海辺
- 11・12 〔漁船〕
- 11・13 泊舟
- 11・16 石鎚山載雪四国第一之高山也
- 昔西条公園處／西条中学校ト成
- 12・1 〔稲刈り風景〕
- 伊予国西條稻荷様写
- 獵師朝火
- 夷鯛
- 牛（図4）、女畑耕、新居郡西条村牛耕様
- 此橋西条加茂川カケル
- 12・3 東方／此所新浜〔遠景〕
- 片上氏蔵瓢写／氷見ニテ瓢会時出品
- 加茂川棧橋
- 芦花
- 12・11 布袋像
- 12・13 氷見町管氏行道写
- 魚市
- 鶏、鶴
- 12・25 市之川共同鉾山工場巡視セシ時写、石割所
- 是ハ伊予国西条遊歴時案内受、始鉾山穴入見学セシナリ



図4

- 市之川鉾山入り口
- 西条岩佐運平氏宅遊行、米表俵作所、米俵縄カケル手
- 瓢の何レニ行テモ常ニ造干テアリ
- 1・3 氷見行車上ニテ
- 白石新一君写、戸田豊五郎氏
- 1・25 海岸ニテ、烏七羽、鷹一羽
- 1・20 伊予国西条和久田家蔵、荒井白石書
- 3・5 於今治吉忠四階ヨリ北ヲ望ム
- 今治漁師町
- 3・7 今治海岸灯台行通鼻先松
- 3・19 於今治吉忠旅館壁ニへばり付所、四国ノコウモリ別ニカワリタル事ナシ、是ハ小形ニ見ル
- 奥院麓、富士讃岐
- 3・20 六萬寺
- 3・21 善通寺、汽車窓にて観る所、屋嶋寺の燈
- 屋島浦、塩家立煙写
- 五剣山
- 志度寺本堂
- 3・22 屋嶋寺遊園行、屋嶋山ヨリ望ム
- 〔塩家風景〕
- 金毘羅事務所の森寛斎の衝立
- 源氏勝白

3 大正三年～四年の旅

次の旅は、「松山行日記」と記されているとおり、目的地は愛媛松山である。⁽⁴⁸⁾
 出発地は京都で、大正三年十一月十八日の午後八時五十分の汽車で出立し、翌日の午前七時三十分には広島に到着する。到着したら直ぐに荷物を置き、車と汽車を乗り継ぎ宮嶋へ向かった。午後三時半に宮嶋に到着した華鳳は、船上から



図5

の風景や厳島神社の赤鳥居、宝物館で目にした面などを描き残す(図5)。特に、厳島神社の本殿などの様子はよく観察しており、板の張り方や柱の数、屋根の装飾など細かにスケッチしている。宮嶋観光を終えた華鳳は、広島まで戻り一泊する。この日は「何分前夜汽車ニテ不眠候故、夕食すむと寝二付」と移動の疲れを感じていたようだ。

十一月二十日の午前八時三十分、宇品港から松山へ瀬戸内海を渡る途中、華鳳はその風光明媚な風景を描いた。まずは朝方の「呉軍港」。天気は曇天で、波も静か、海に静かに浮かぶ軍艦は黒いシルエットで描かれ、その重厚感が表現されている。次に通るのが音戸である。音戸の瀬戸とも呼ばれ、平清盛が切り開いたという伝説がある。華鳳のスケッチでは、海の中央に石造りの燈籠が置かれ、海岸沿いには漁師小屋のような建物が並んでいる。音戸の両岸が迫るような狭い海道の様子をうかがい知ることができるだろう。

松山の高浜港に着いた華鳳は、高浜に浮かぶ特徴的な島、四十島を描く。四十島の特徴でもある丸い穴もあり、「丸キハ穴ナリ、能ク舟の通観」とコメントを付している。高浜から移動した華鳳は、古町駅で下車するが、その道中の風景も楽しんでいったようだ。松山ではまず、魚町二丁目で営業していた「高知屋」という旅館に7日間逗留する。

十月二十一日には、道後温泉に遊びに行く。華鳳の記録だとこの後、二十二日、二十三日、二十四日も道後温泉へ行っており、道後の湯を楽しんだようである。道後に関するスケッチは図6の湯釜があり、その由来等も「宝珠形蓋上ノ字ハ一遍上人ノ筆ト称ス」のように添えられている。十一月二十三日の朝六時、華鳳は三津浜の方へ写生に出



図6

と興居島も姿も描かれ、見開き五ページにもわたる。もちろん、他の写生よりも書き込みが多く、「半日天使に遊ヒ全市景を觀察ス」とその風景に魅せられたようだ。また、「松平家甲冑及ヒ古武器数多珍列ス」と、城内の展示の様子も記している。

翌日の二十六日には、表具師の能智寅之助という人物に逢っている。能智氏の周旋により、華鳳は高知屋旅館から、三番町にある大谷楼という旅館へ移動する。またこの時、「日の出波図」と「岩上恵美子図」の二作品の依頼を受けている。華鳳は旅先で依頼を受け、その収益を旅の費用に充てていたようである。

さて、二十七日には三津浜である人物に会ったようだ。その人物は、近藤文太郎⁵⁰⁾である。文太郎と言えは、富岡鉄斎と交流があることで有名であるため、鉄斎と交流があった華鳳も彼を訪ねたのではないかと考えられる。ただ、華鳳の記録には「近藤文太郎氏と云所参りしも、此家ハ富岡鉄斎浪人の三十年以前

かけた。ここでは、漁で釣り上げた魚に「釘鎌」を打つ様子や鯛を秤にかける様子、船上で網を引く人々など、賑わう朝の漁港の姿を写し描いている(第3章図13・14)。華鳳は「魚市妙也して如何ニ漁樂集之様あり」と記しており、その様子を楽しんで見ていたようだ。

二十五日は早朝から松山城へ昇り、天守から西北望む全景を写している(図7)。この方角には、高浜や三津浜を見ることができ、「俗小富士云」



図7

即ち先生堺鳳神社之時ヨリの今に二至ルニヨリ中くの数幅所蔵也」とあるのみで、文太郎との交流は一切触れられておらず、交流があったのかも謎である。文太郎は大正七年（一九一八）に七十九歳で亡くなっており、晩年の文太郎とは会うことが難しかったのかもしれない。

十二月、道後温泉の玉の湯にて、華鳳は三津の「石崎運送店主人」と出会う。おそらく、石崎兵太郎のことだろう。華鳳と石崎氏の交流については、詳細を知ることができないが、何度か石崎氏と道後温泉で出会っており、温泉が交流の場となっていた。また、同じく玉の湯にて、山田松華と称する人物にも出会い、交流する。華鳳はこの山田氏の紹介で、十二月十九日、砥部の阿部正剛を訪ね一泊し、砥部焼の工房を見学している（第3章図19・21）。砥部から松山の大谷楼へ戻った翌日には、十一月二十六日に表具師の能智氏に依頼を受けていた作品の日の出波図を渡し、金十円を受け取った。

さて、年が変わった大正四年元日は、松山で出会った人々と会ったり、作品依頼があった能智氏と酒を楽しみ過ごしていた。華鳳は、松山の名所に興味があったようで、写生帳には松山の名所について歌われた「伊予節」が記される。華鳳は伊予節にもある「十六日櫻」を見るために、二月十六日に龍穩寺へ訪れた。ただ、龍穩寺の境内や鐘を突く人物などのスケッチ（第3章図22・23）はあるが、桜の絵がないことから、期待していた「十六日桜」を見ることはできなかったのかもしれない。



図8

二月二十一日には、伊豫豆比古命神社、通称椿神社へ参詣する。社殿や全景の写生があり「此社ハ野中ニ有テ一町四面之内ニアリ、一森ノ形ス椿多師シ、故ニ俗名ツバキサント云」と「椿さん」と親しまれている様子が添える（第3章図24・25）。

三月になり、道後温泉で出会ったという柴田源之、田中梅吉と脇ヶ淵等に行き、自然風景を写生する。また、別日には、西山大宝寺へ出かける。ここは、小泉八雲の怪談にも登場する姥桜の舞台でもある。華鳳も姥桜に興味を抱いており、「一重ニシテ色薄し、花如図さく也」と桜のスケッチに精を出していた（第3章図26・27）。龍穩寺の十六日桜、大宝寺の姥桜と松山の桜を楽しんだ華鳳は、四月十七日に伊予節にも登場する松山名所「薄墨桜」も見に西方寺へ行く（図8）。華鳳は薄墨桜が気に入ったのか、翌日の十八日にも再び訪れ、写生を楽しんでいた。

大正三年から四年にかけて旅行では、広島から愛媛へ瀬戸内海を渡り、松山を中心に様々な場所へ足を運び、写生を行っていた。また、道後温泉へも通っていたようで、温泉だけではなく、そこで出会う人々との交流も楽しんでいる様子を見ることが出来る。写生帳の記録では、四月二十九日の満月の絵で終わっており、それ以降の足取りを知ることができないのは残念である。

【大正三年～四年の写生（一部抜粋）】

- 11・19 宮嶋（風景、建物、宝物等）
- 11・20 呉軍港、松山行途中寫山、音戸の瀬戸、四十島、高浜ヨリ松山行途中
海辺望図
- 11・23 三津の漁業、三津浜燈台
- 11・25 於松山城天守西北面望ム図
- ―― 三津浜夕暮
- ―― 鯛を持つ人物
- 2・16 龍穩寺
- 2・21 伊豫豆比古命神社
- ―― 道後温泉ヲ山上ヨリ見渡ス
- ―― 松山城西望ム
- 2・25 郡中ヨリ北望ム図
- ―― 郡中夕景
- 3・―― 脇ヶ淵
- ―― 石手川水上
- 3・9 西山大宝寺
- 4・17 薄墨桜
- 4・18 薄墨桜（西方寺）
- 4・23 高浜朝、四十島、大三島神社
- ―― 湯釜
- 4・25 太山寺
- 4・29 満月於松山写午後八時東南暉

第3章 華鳳が見た愛媛の風景

ここまで、大正元年・二年の旅、同三年・四年の旅について、華鳳がどのような場所に訪れていたのか整理してきた。次は、八冊の写生帳から、華鳳が見た愛媛の風景について、その一部を紹介する。

1 瀬戸内海に浮かぶ船

華鳳は、愛媛に滞在している間、たびたび海岸へ赴き、漁船等のスケッチを行っていた。ここでは、華鳳が見た愛媛の船の姿を、地域別に紹介する。

【西条・新浜】



図9

図9・10は、大正元年に西条・新浜で描かれた「漁舟干網」である。船上で作業する人物も描かれる。船にかけられているのは漁に使用する網であろうか。船に網を干す様子に興味があったのか、複数ページにわたり、漁船と干網を描いている。

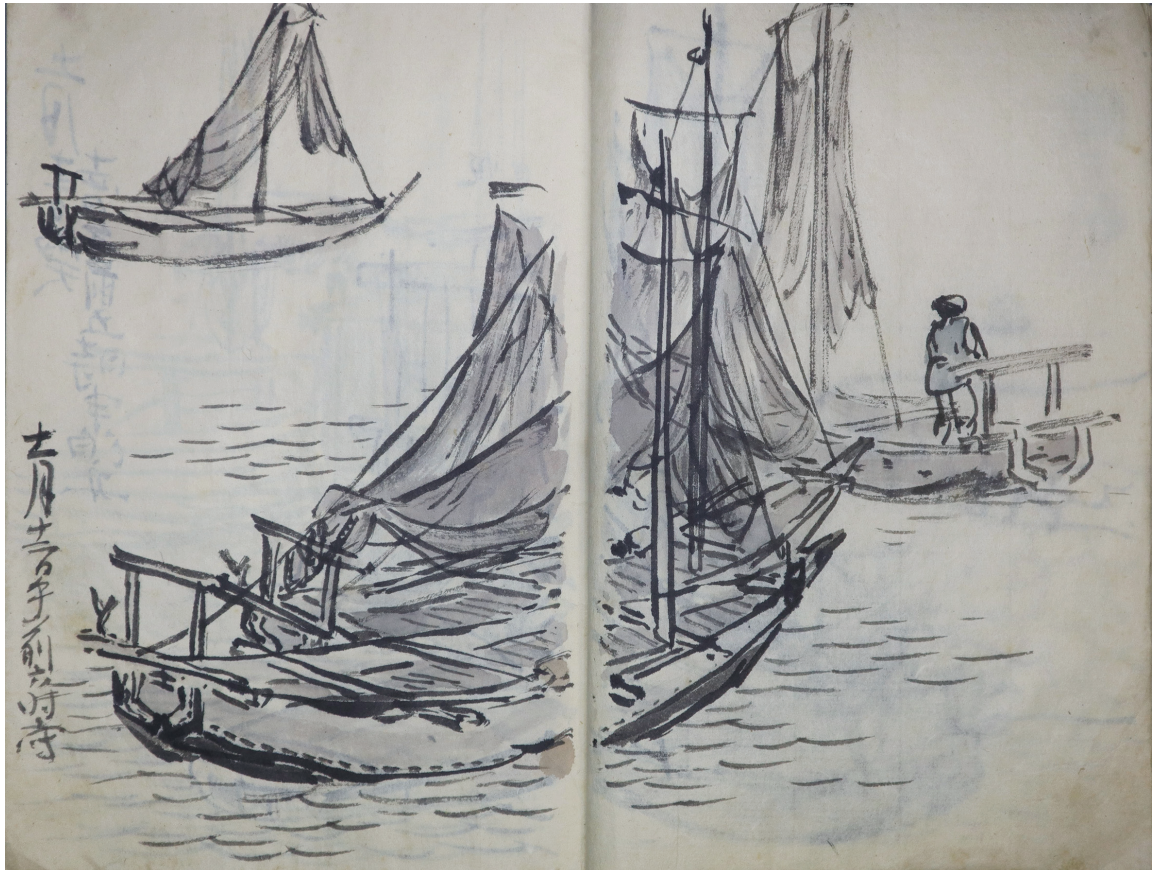


図10

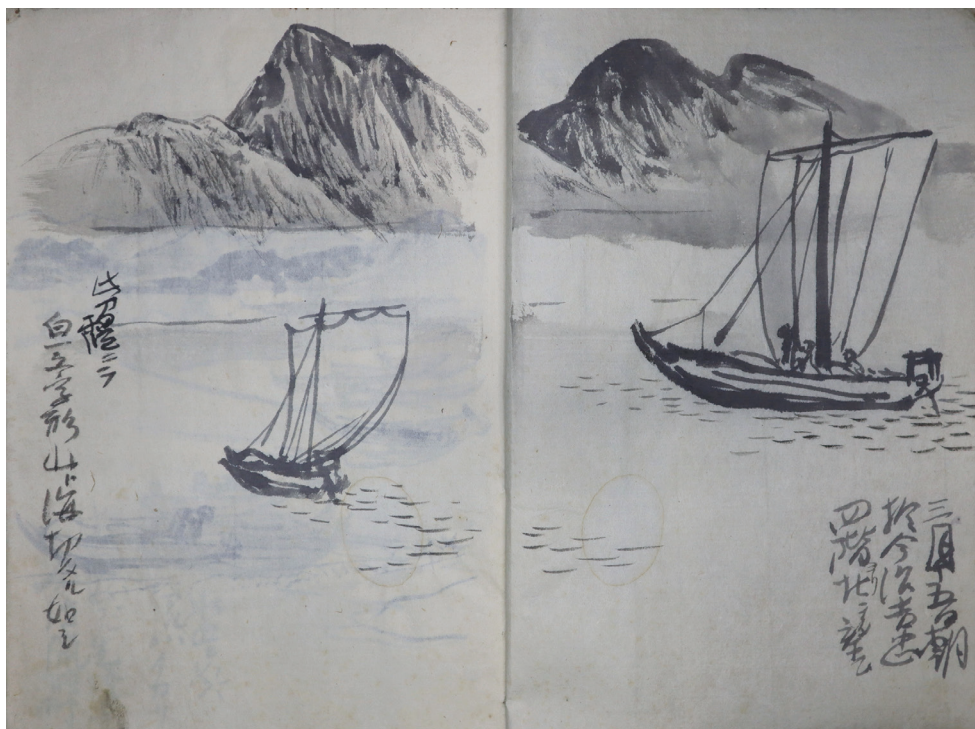


図11

【今治】

図11は、大正二年の今治に滞在していた際の写生である。宿泊している旅館の四階からの眺めを描いており、帆に風をうけて水上を行く船の様子がわかる。



図12

図12も今治で描かれた海岸沿いの風景で、砂浜のような場所に、小型の船が並べて停められている。海に浮かぶ船の後方には、「*」のようなものが描かれているが、これは錨を表現している。



図13

【三津浜】
図13は大正三年に三津浜で描いた漁の様子である。一人又は二人乗りの船が三艘あり、その中央に魚がかかった網か籠のようなものがある。画面左側には、魚の処理をしているようで、「細釘鎌ニテ生魚イタメル様也」と記される。



図14

図14も、三津浜の朝の様子である。船上で魚を籠に入れる漁師や、秤で重さを計測している様子などが描かれる。朝市で有名な三津浜の、活気ある漁師の姿を見ることができらるだろう。



図15

図15は渡し舟の様子を描いている。船には、頭に桶を乗せた女性「おたさん」の姿が確認できる。「おたさん」とは、御用桶と呼ばれる木桶に魚を入れ、頭上に乗せ売り歩いた女性の行商人である。愛媛県の松前町や松山近辺の女性とされており、戦時中は朝鮮へも渡っていたという。

2 市之川鉾山

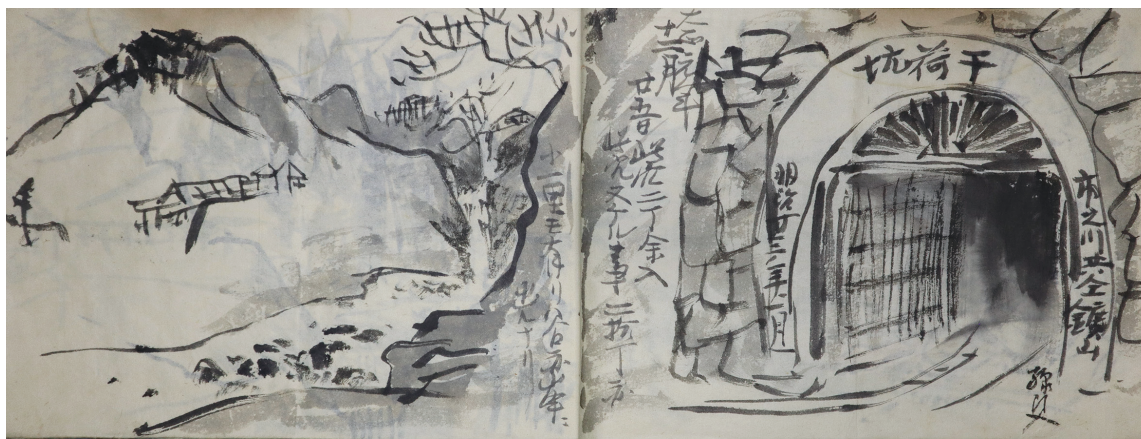


図16

大正元年十二月二十五日に訪れた市之川鉾山では、働く人々の様子を描いている。市之川鉾山は、かつては国内最大級といわれていた輝安鉾山である。最盛期は明治中期と言われており、生産量も多く、鉾石の価格も高騰した。また、内国勸業博覧会やパリ万国博覧会、シカゴ万国博覧会で受賞もされ、その賞賛は高まったという。大正初期には、戦争がはじまると砲弾の材料としてアンチモンが使用されていたこともあり、再度採鉾が盛んになるも、昭和期には採鉾量も減り、昭和三十二年（一九五七）に閉山となった。

鉾山では主に採鉾・選鉾・製錬という作業があった。華鳳は「石割所」で行われる砕鉾や選鉾の様子を見学しようだ。

図16は市之川鉾山の入り口で「千荷坑」の文字が確認できる。



図17

図17は、市之川鉾山の石割所の様子である。ここでは砕鉾作業が行われていた。

華鳳のスケッチからも見てわかるように、これらの作業には女性が従事していた。彼女たちは破婦と称され、輝安鉾を含む鉾山と廃石とに選別を行っている。



図18

図18は、選鉱作業の風景である。碎鉱で細かくされた鉱石を、ざる等に乘せ水につけ、水中で輝安鉱と石に分けるそうだ。これらの作業は、揺婦と称された女性たちが行っており、鉱山という現場で働く女性の姿を知ることができる貴重な記録である。



図20



図19

3 砥部焼

大正三年十二月十八日、華鳳は砥部焼の工房へ見学に出かけた。写生帳には「砥部ハ松山ヨリ二里半、汽車にて森松迄行、それより車にて山間ニ入所也」と記している。

図19は茶碗を製作している場面か絵付けの場面で、図20は絵付けの作業である。作業する人物の周りには、たくさんの茶碗が並べられており、砥部焼の生産が盛んにおこなわれていたことがうかがえる。

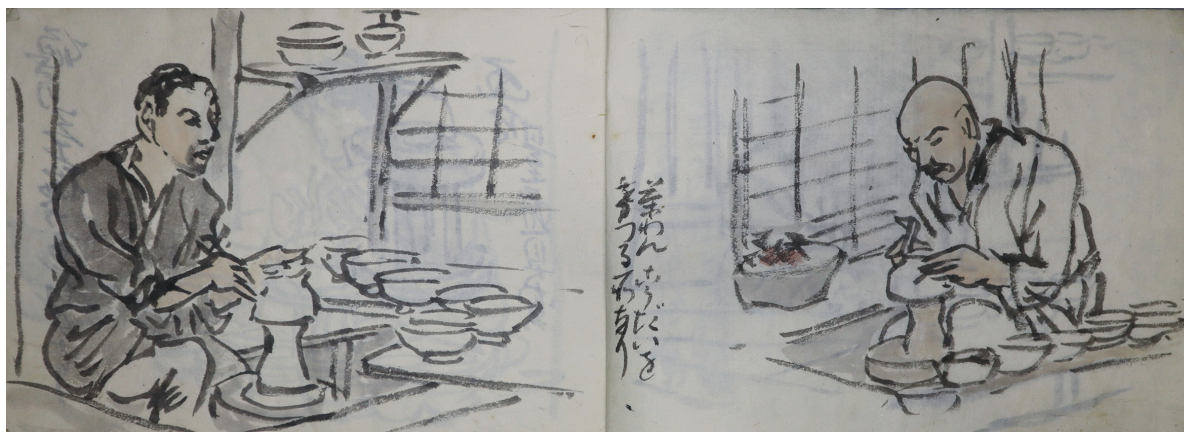


図21

図21は、茶碗の高台を作る場面である。作業する人物の真剣な表情が印象的に描かれている。また、十二月という寒い時期のため、火鉢も側に描かれており、作業場の様子をうかがい知ることがもできる。

華鳳は、十一月三十日に砥部焼の急須二個と茶碗五つを購入しており、砥部焼は愛媛の代表的なお土産であった。おそらく何度も訪れていた道後で購入したと思われるが、砥部焼にも興味があった華鳳には、この砥部への訪問は非常に面白いものであったと思われる。この砥部への訪問も、松山で出会った山田という人物の斡旋であり、華鳳の交流から生まれたものであった。

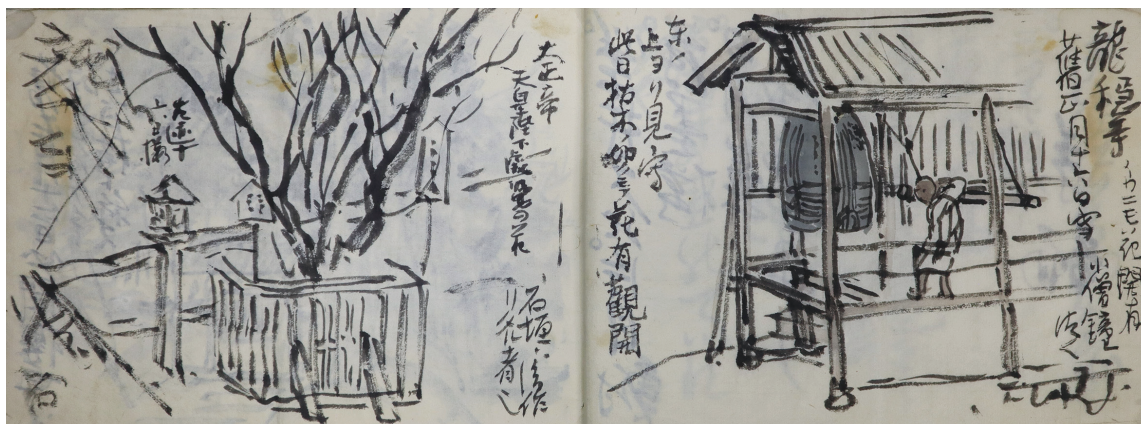


図22

4 寺社

松山で様々な写生を行っていた華鳳は、神社や寺にも訪れ、建物や風景を写している。

図22は、松山にある龍穩寺に参詣した際のスケッチである。龍穩寺は、河野通直が開創した曹洞宗の寺で、十六日桜でも有名であったが、戦災で焼け枯死した。

華鳳が訪れたのは大正四年の二月十六日で、鐘をつく小僧の姿と十六日桜を写している。十六日桜は花卉の写生が残っていないことから、この日にはまだ開花を見ることはできなかったようだ。



図23

図23は龍穩寺の全景である。端には、十六日桜について、旧正月十六日に必ず開く桜のため、その呼称が付いたと簡単な由来が書かれ、画面左側の建物の前には、花が付く前の桜の木が描かれている。

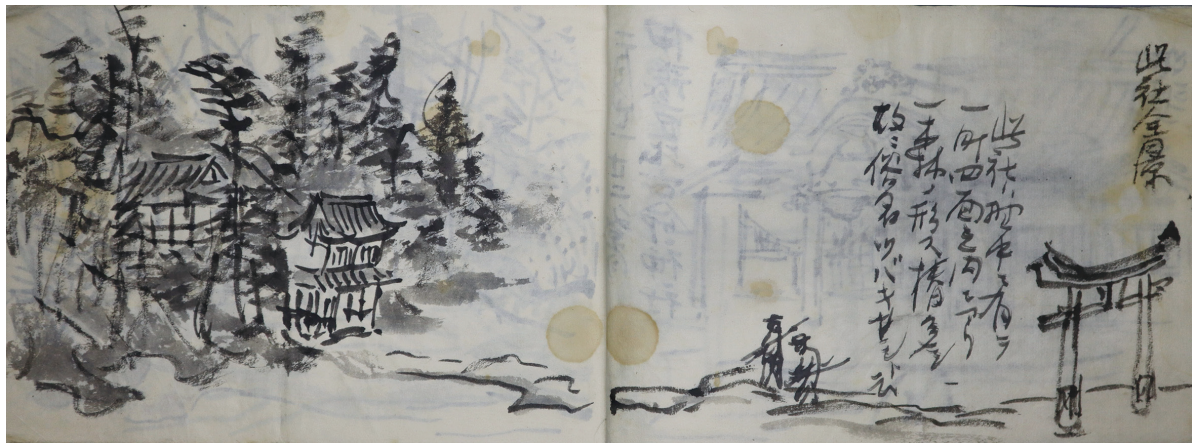


図24

図24は大正四年の二月に訪れた伊豫豆比古命神社、通称椿神社である。鳥居から社殿への全景には、参拝する人々の姿も見ることができる。

社殿は木々に覆われており、森の中にたたずむ社殿が印象的である。椿神社の由来については、津の脇の神社という意の「つわき神社」が訛ったという説や、境内に椿が自生することから「椿神社」と呼ばれるようになったとの説がある^②。



図25

図25は、伊豫豆比古命神社の拝殿である。現在も拝殿の前には階段があり、その面影を見ることができる。屋根には千木と呼ばれる木材の交叉が見られる。現在の拝殿とは異なる屋根だが、伊豫豆比古命神社のホームページに掲載されている昭和十五年（一九四〇）の写真には、千木を確認することができ、華鳳が描いた拝殿と似た雰囲気を見ることができる。

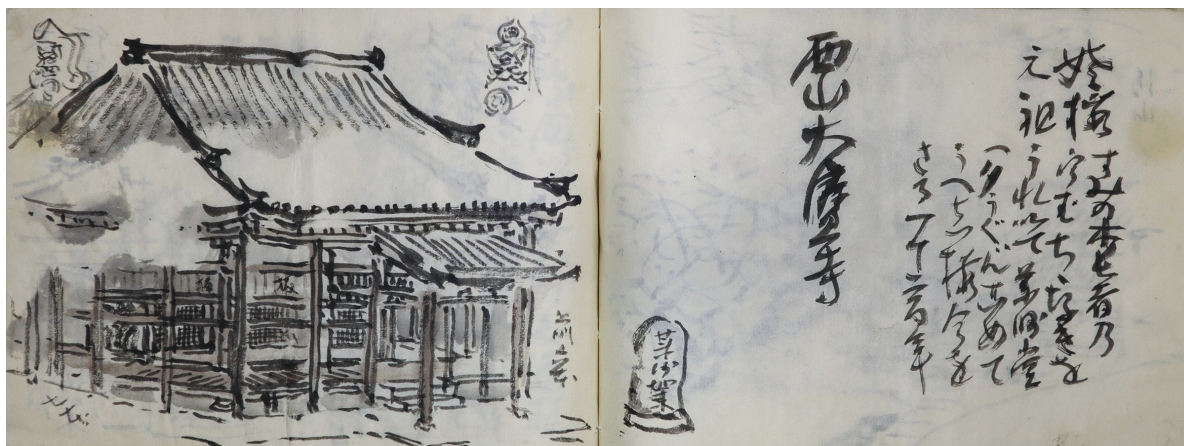


図26

図26は「西山大宝寺」とあるように、松山城の西にある小高い山「西山」に建つ大宝寺本堂のスケッチである。

大宝寺は、大宝年間（七〇一～七〇四）の創建と伝えられ、その本堂は鎌倉時代初期の建築と考えられている。大宝寺本堂は、堂内の厨子と貞享二年（一六八五）再興の棟札とともに、昭和二十八年（一九五三）に国宝に指定される。

華鳳は本堂の様子を細かく観察しており、柱の本数を記したり、鬼瓦のスケッチを描いたり、他の寺社に比べて丁寧を描いている印象がある。



図27

図27には、正面から見た本堂のスケッチもある。図26ほどの書き込みは見られないが、「此堂一千餘年余事」「大宝年間創立故即チ大宝寺ト名付ケタリト云一話二」と、大宝寺の歴史にも関心があつたようだ。また、姥桜についても記載があり、その花卉の様子を「一重ニシテ色薄し」「葉モ青クアリ」と絵とともに記録している。

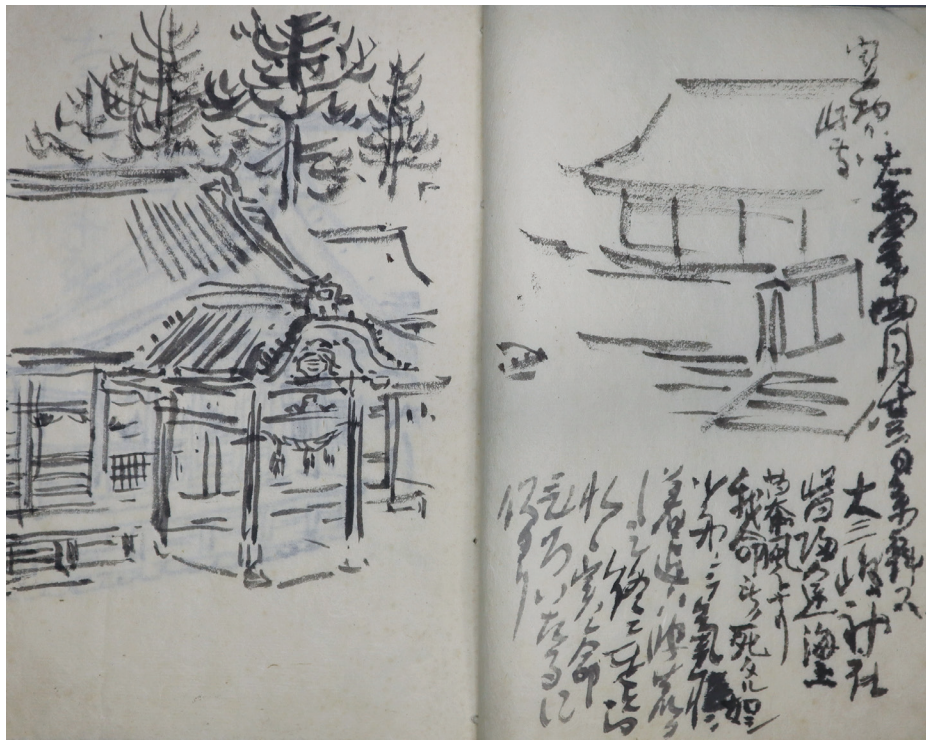


図28

図28は、大正四年四月二十三日に参拝した、大三嶋神社のスケッチである。大三嶋にある大山祇神社のことで、描かれた拝殿には神紋の「隅切折敷縮三文字」を確認することができる。華鳳はこの参拝の帰途、小舟に乗っていたようだが、海上の風が強くなり、波も荒れ、命の危機を感じるほどだった。

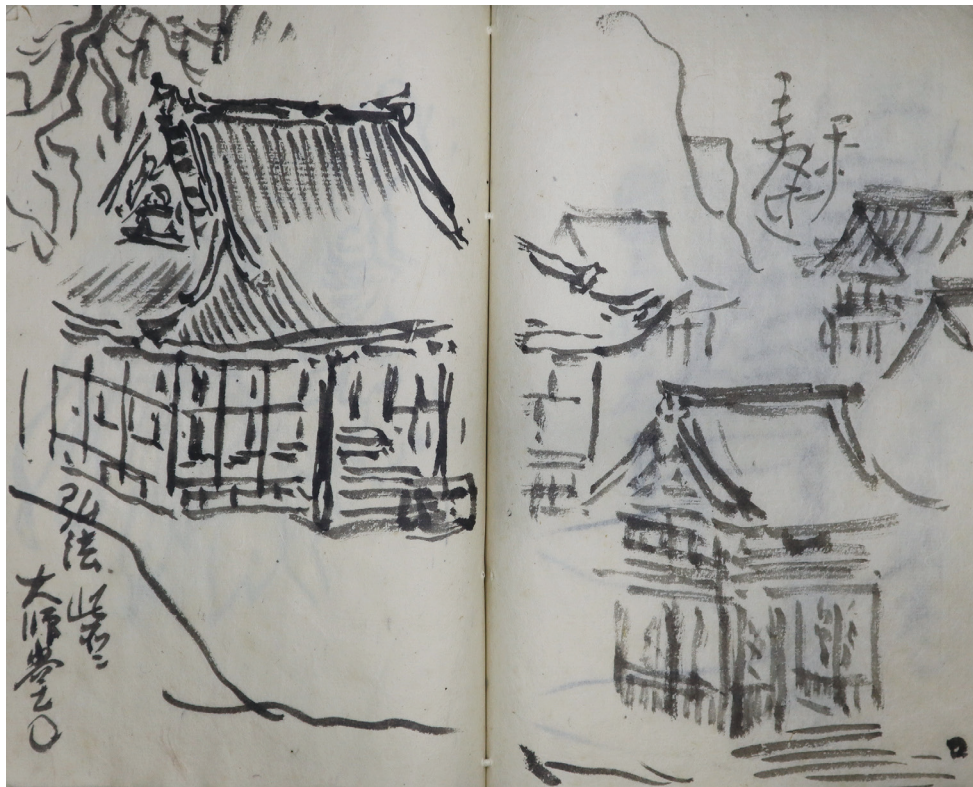


図29

図29は、四国遍路八十八カ所霊場第五十二番札所でもある太山寺である。手前に描かれているのが仁王門、その奥に建つのが本堂だろう。嘉元三年（一二〇五）の建立とされる本堂や仁王門は、大まかな線で描かれているが、その姿形や屋根の特徴などをとらえている。



図30



図30（一部拡大）

道後温泉の近くには、四国遍路八十八カ所霊場第五十一番札所の石手寺がある。
図30は、華鳳が大正四年二月十七日に訪れた石手寺を望む風景である。見開き三ページに描かれたパノラマ景の左側に石手寺の建造物を確認することができる。石手寺の三重塔は延久五年（一〇七三）に再建されたもので、重要文化財に指定されている。三重塔の手前には、文保二年（一一三八）に建てられた仁王門も確認することができる。

おわりに

以上、京都の画家・中島華鳳について、その活動や旅の様子を見てきた。慶応三年、京都に生まれた中島華鳳は、愛媛県ともゆかりある富岡鉄斎とも交流を持ちつつ、今尾景年に師事し、京都後素協会等に出品するなど活動を行っていた。写生を重要視していた今尾景年の影響か、華鳳も多く写生を行っていたことは、過去の入札会目録に掲載されている写生帳からうかがい知ることができるだろう。

当館が所蔵する華鳳の八冊の写生帳は、大正元年から四年のものが、内三冊が大正元年から二年までの旅、五冊が大正三年から四年の旅というように、二度の旅に分けることができる。大正元年からの旅の始まりは、数か月滞在していた愛媛県西条市であり、途中今治市に一週間程度滞在後、香川を訪れている。そして、大正三年からの旅は、京都から広島を経由し、松山までの旅である。このことから、大正元年から二年の旅の後、一度京都に戻っていたことがわかるだろう。

八冊の写生帳には、華鳳が見た風景や人物等の写生と日付や天気等メモ書き、旅の行程をまとめた記録が混在している。同じ内容の記載が数冊の写生帳に記されていることもあり、旅行中に記したものか、後にまとめたものか判別できないものもあるが、旅行中に複数冊の写生帳を持ち歩いていたと思われる。また、縦帳や横帳の複数ページにわたりパノラマ景を描くのも、華鳳の写生帳の特徴である。特に、大正三年に広島から船で瀬戸内海を渡る途中の風景は、多くのパノラマ景を描いており、瀬戸内海の多島美を華鳳も楽しんでいたようだ。

華鳳が描いたスケッチを見てみると、花鳥画を得意とした今尾景年に師事していたこともあり、鳥や桜等に動植物を観察したものは多い。松山では滞在した時期の影響もあるだろうが、十六日桜・姥桜・薄墨桜と有名な桜の名所を巡っている。また、漁船や漁師の姿、稲刈や米俵を作る様子、市之川鉱山で働く女性たち、砥部焼を作製する工房の人々など、愛媛の産業と働く人々を多く描いている。華鳳のまなざしを通じて、愛媛の産業の様子をうかがうことができる貴重なスケッチである。

本論では、中島華鳳の人物像や活動について、その一端を明らかにすることを試みた。華鳳の画家としての活動は、内国勸業博覧会や京都後素協会の展覧会等への出品を確認することはできたが、出品作品の現存は明らかではない。また、大正初期における愛媛県への滞在や旅行について、その理由や経緯について確認する資料もなく、また旅の終わり、つまり京都への帰路に関する内容も不明である。中島華鳳について、作品も生涯も不明な点が多いが、富岡鉄斎との関係など興味深い疑問は多く、今後の研究の深化が期待される。

※愛媛県歴史文化博物館 主任学芸員

註

- (1) 『愛媛県歴史文化博物館資料目録第一七集 絵画資料目録』（愛媛県歴史文化博物館、二〇〇九年）。
- (2) 『瀬戸内海国立公園指定九〇周年記念 瀬戸内海ツーリズム』（愛媛県歴史文化博物館、二〇二四年）。
- (3) 『美乃世界』(6) 美術新報社1912.11. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1521342>)。
- (4) 福岡硯洲 著『大正画家列伝：明治画史』 坤富田文陽堂大正12 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1183776>)。
- (5) 樋口文山 編『日本美術画家詳伝』 続篇日本美術鑑賞会大正12 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/926794>)。
- (6) 江戸中・後期の画家。字は叔牙。大阪の人。名は守象。はじめ狩野派を学んだが、のち円山派を加味して写生的様式に展示、動物画、特に猿猴の図を得意とする異色画家として名声を得る（『日本国語大辞典』第二版、小学館）。
- (7) 江戸後期の画家。金沢の人。岸派の祖。号は蘭斎、虎頭館。独学で絵を習得し、一家を樹立。有栖川家、のち朝廷に使え、越前守に進む。絵には清の沈南蘋や円

- (8) 山派の影響がみられ、特に虎の絵で名高い『日本国語大辞典』第二版、小学館。
- (8) 斎藤全人「円山派、近世から近代へ」(『描き継ぐ日本美―円山派の伝統と発展』宮内庁、二〇一二年)。
- (9) 梶岡秀一「富岡鉄斎はどのような人だったのか？ 没後一〇〇年に向けて再考」(『没後一〇〇年 富岡鉄斎』、毎日新聞、二〇二四年)。
- (10) 春子の実家である佐々木家は大洲藩士で、明和元年(一七六四)以降は御船手奉行所の人仕役を勤めたという。春子と鉄斎との縁談をまとめたのは野呂久左衛門直貞であり、鉄斎と密接な交流があった。鉄斎と春子の結婚については、梶岡秀一氏の「伊予と鉄斎をめぐる四題―矢野玄道・富岡春子・予州滞在・天野方壺」(『富岡鉄斎展 あるコレクターが見た画業七十年』愛媛県美術館・徳島県立近代美術館・EMIネットワーク、二〇〇三年)に詳しい。
- (11) 京都国立博物館の館蔵品データベースにて閲覧可能 (<https://knmdbkyohaku.go.jp/list.html?at=search%2Flist&limit=50&sl=E%4%B8%AD%E5%B3%B6%E8%8F%AF%E9%B3%B3>)。
- (12) 『文人画の近代 鉄斎とその師友たち』(京都国立近代美術館、一九九七年)。
- (13) 『没後一〇〇年 富岡鉄斎』(毎日新聞、二〇二四年)を参考とした。
- (14) 富岡鉄斎「画」ほか『富岡鉄斎・辰馬考古資料館新収 辰馬悦蔵翁旧蔵』辰馬考古資料館[1981]、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/12676193>)。
- (15) 日本画・南画で、山・崖・岩石などの巖を描いて陰影や立体感を表現する画法(『日本国語大辞典』第二版、小学館)。
- (16) 本文中において、中島華鳳を中島華陽(鉄斎の最初の妻の実父)の孫とし、華鳳のために書き与えたお手本と解説する。ただし、華鳳と華陽の関係は未だ不明な点が多い。また、「落款御手本」の文末には「為中島華鳳子鉄斐画」とあり、中島華鳳の子どものために鉄斎が画いたと考えることもできる。明治三十四年(一九〇一)は華鳳三十五歳であり、妻子の存在も考えられるが、華鳳の婚姻関係については不明なため、今後も研究が必要となる。『文人書譜』12、淡交社1979.10、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/12428365>)。
- (17) 鉄斎が景年の新居祝いに贈った「養素斎書」(明治三十一年、京都文化博物館管理)は、景年への鉄斎の敬意がうかがえる書である(『没後一〇〇年 富岡鉄斎』、毎日新聞、二〇二四年)。
- (18) 円山流を好み、四条派を交え、更に文人画の趣味を加えて一家をなした。鈴木松年は百年の子であり、今尾景年、久保田米僊などは其門人である。(関衛著『日本絵画史』、日東書院昭和6、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1176491>))。
- (19) 金港堂編『第五回内国勸業博覧会審査官列伝』前編金港堂明36.4、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/778317>)。
- (20) 今尾景年 画『景年花鳥画鑑』、青木恒三郎明25.11、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/850419>)。
- (21) 神崎憲一著『京都に於ける日本画史』、京都精版印刷社昭和4、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1171038>)。
- (22) 『祇園祭の美』(京都市自治一〇〇周年記念特別展「祇園祭の美―祭を支えた人と技―」実行委員会、一九九八年)。
- (23) 岩戸山については、公益財団法人岩戸山保存会HP (<https://www.iwatoyama.jp/>)及び、「祇園祭―岩戸山の名宝―展のご案内」(京都文化博物館、二〇一七年)を参照した。
- (24) 『明治前期産業発達史資料：勸業博覧会資料』132、明治文献資料刊行会1974、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/11996471>)。
- (25) 『内国勸業博覧会―明治美術の幕開け』(宮内庁三の丸尚蔵館、二〇一二年)。
- (26) 明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料108』(昭和49)では、出品作品名が「月下水仙図」となっている。
- (27) 『明治前期産業発達史資料：勸業博覧会資料』72、明治文献資料刊行会1973、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1200692>)。
- (28) 松井忠兵衛編『絵画展覧会出品目録』明治23年、三明23、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/850105>)。
- (29) 『美乃世界』9、美術新報社1908.12、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://>

- dlndl.go.jp/pid/1521296)。
- (30) 墨で表現したものが生き生きとしているさま。筆の跡がみずみずしいさま(『日本国語大辞典』第二版、小学館)。
- (31) 雄大で勢いのよいこと、書画の筆勢や詩文などが力強くよどみのないこと(『日本国語大辞典』第二版、小学館)。
- (32) 五十嵐公一「如雲社の出発点―京狩野家資料を手掛かりにして―」(『藝術(三九)』、二〇一六)。
- (33) 京都後素協会は明治二十八年十二月一日に総会を開き、規約や会員を決定した。その趣旨では、「本会は京都画家の団体にして斯道の発達を計るを以て目的とす」とし、月次会(月一回)・展覧会(年一回)・共進会(三年毎)に開催する。明治二十八年では、会頭は未定、副会頭は雨森菊太郎、委員長に今尾景年がなった。浦崎永錫著『日本近代美術発達史』明治篇 第7:大潮会出版部1959. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/2465876>)。
- (34) 『美乃世界』(18)美術新報社1909-08. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/1521304>)。
- (35) 『美乃世界』(20)美術新報社1909-10. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/1521306>)。
- (36) 『美乃世界』(52)美術新報社1912-02. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/1521333>)。
- (37) 『美乃世界』(42)美術新報社1911-08. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/1521325>)。
- (38) 『美乃世界(五二)』では、出品者・作品名・形態・解説に加え、作品画像も掲載されており、華鳳がどのような作品を描いたのかうかがうことができる。『美乃世界(五二)』については、註35を参照。
- (39) 註3に同じ。
- (40) 『美乃世界』(70)美術新報社1913-07. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/1521350>)。
- (41) 『古典籍下見展観大入札会目録』昭和60年11月東京古典会1985.11. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/12237004>)。
- (42) 『古典籍下見展観大入札会目録』昭和63年11月東京古典会1988.11. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/12236658>)。
- (43) 明治古典会目録部 編『明治古典会七々大入札会目録』昭和63年／本文篇明治古典会1988.6. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/12400253>)。明治古典会目録部 編『明治古典会七々大入札会目録』昭和63年／図録篇明治古典会1988.6. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/12400254>)。
- (44) 愛媛県西条市明屋敷の三本松のマツがある場所に、これらの碑を確認することができる。
- (45) 輝安鉱とは、アンチモンの硫化鉱物で、斜方晶系、柱状または針状結晶である(『日本国語大辞典』第二版、小学館)。
- (46) 愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』(愛媛県、一九八九年)。
- (47) 華鳳が描いたパノラマ景のスケッチについては、令和五年度冬季特別展「瀬戸内海ツーリズム」において紹介している(『瀬戸内海国立公園90周年記念 瀬戸内海ツーリズム』愛媛県歴史文化博物館、二〇二四年)。
- (48) 『伊予国松山日記／厳島宝物日記／写生帳』『伊予松山旅行』(当館蔵)。
- (49) 昭和二十九年(一九五四)十一月二十四日に愛媛県指定有形文化財(建造物)に指定。所在地は松山市道後公園、管理者は松山市である。
- (50) 大正十年(一八三九)〜大正七年(一九一八)。愛媛県における珍味(儀助煮)製造の創始者である。文太郎は三津町で石崎平八郎が経営する船問屋(現石崎汽船の前身)の番頭を務めていた。明治六年(一八七三)、富岡鉄斎が愛媛に訪れた際は、近藤家の世話になっており、その際に文太郎も鉄斎と交流するようになる(『愛媛県史 人物』)。
- (51) 『Kwaidan. Tr. and annotated by R. Tanabe』Hokuseido,1923. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dlndl.go.jp/pid/1677706>)。
- (52) 伊豫豆比古命神社ホームページを参照 (<https://tubakio.jp/>)。